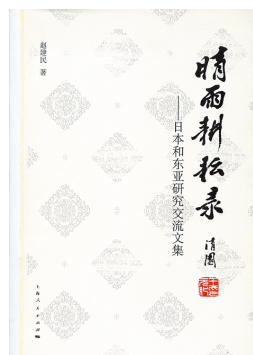


趙建民著

『晴雨耕耘録——日本と東アジア研究交流文集』

趙建民『晴雨耕耘録——日本和東亜研究交流文集』上海人民出版社、二〇一四年

王 宝平



一九四九年、新中国が成立した後の日本研究は激動の時代の嵐にあおられながら、六十余年の星霜を閲した。「三大家」と尊敬される呉廷璆（一九一〇～二〇〇三）、鄒有恒（一九二二～二〇〇五）、周一良（一九一三～二〇〇二）が初代の研究者と推されているのに対し、趙建民教授をはじめとした学者は、二代目の日本史の研究者に属するであろう。氏は長年、復旦大学歴史学科で教鞭を執りながら、ひたすら日本史の研究を行い、その代表作『日本通史』（復旦大学出版社、一九八九）は、中国大陸初の日本通史として広く知られている。

最近、氏は三十年来の研究成果を『晴雨耕耘録——日本和東亜研究交流文集』にまとめて公刊した。論文三十六本、その他（書

評・感想・追想等）十七本を収めた六百ページ、五十一万字に上るこの大著は、「中日文化の相違」「欧州近代文化の受容における中日比較」「蘭学——日本近代化の萌芽」「儒学の逆輸出」「中日教育の交流」「戦争による損益」「東アジアからみた日本」という七つの章立てとなっている。どれも鮮明な「問題意識」に基づいて書かれた論考である。「問題意識」とは常に中国人の立場に立脚し、中国を参考にし、中国の現実と関連づけて日本史研究のテーマと必要性を見出そうとすることである（八頁）。

「問題意識」として最初に挙げられるのは、中国の近代化のための日本研究であろう。三十六本の論文は、唐代（『正倉院宝物』にみられる中日文化交流の特徴）。論文の題目は書評者の翻訳による。以

下も同)から始まり、現代(『東亜共同体』構築の思想的文化的基礎)まで、千五百年にわたるタイムスパンを持つているが、その中心を成すのは江戸時代以降の歴史である。江戸時代については、『大阪蘭学の始祖——橋本宗吉の生涯と業績』『志築忠雄の『歴象新書』の翻訳と自然観』『江戸時代の優れた町人学者——山形蟠桃』『シーボルト——日本の開国を導く最初の者』『シーボルトの日本研究及びその国際的影響について』『本草学から植物学へ——シーボルトの日本自然史研究に対する貢献』『頼山陽の『日本外史』と中日の史学の交流』『『日本外史』及び中国における流布について』『頼山陽の史学思想への一試論』『朱舜水研究の回顧と展望』というように、紙幅を大幅に割いて、蘭学者橋本宗吉・志築忠雄、町人学者山形蟠桃、ドイツ人医者シーボルト (Schödl, Philipp Franz von)、儒者頼山陽・朱舜水をめぐって研究している。氏が江戸時代を重要視するのは、同時代を日本の近代化の源として認識しているからに他ならない(九頁)。

そして、「欧州近代文化受容の中日比較」の章では、「日本の西洋近代文化受容における中国の役割」「中日両国の外来文化受容に関する史的考察——西洋近代文化を中心に」「中日両国の西洋近代文化受容の一比較」「日本の西洋近代文化吸収に対する中国の研究——その現状と成り行き」というように、西洋の近代文明の受容における中日の相違を詳しく分析している。

さらに「中日文化の相違」の章では、「外来文化と伝統文化の融合——中日両国近代化の過程を兼ねて」「中国文化の伝統と日本の近代化——日本の近代化における儒家思想の影響を兼ねて」等の論文で、中日の近代化遅速の原因を文化面に求めている。

周知のように、近代化は、二十世紀の後半から立ち遅れた中国に課せられた最大の課題であった。その目標を達成すべく、氏は他の多くの研究者と同様に、近代化に対して多大な関心を寄せ、そして、その答えを日本から見出そうと懸命に努力されていた。

「問題意識」として次に挙げられるのは、現実問題の研究である。二十世紀の後半より、歴史認識の問題が東アジアに横たわる現実問題として現れてきた。氏は日本史研究者として、「抗日戦争中における日本の中国文化財に対する破壊と掠奪について」「南京大虐殺」における図書掠奪」「日本軍による浙江の図書・文物の掠奪」「香港占領日本軍の馮平山図書館の掠奪」という一連の論文を発表し、戦時下日本軍による中国の図書や文化財に対する破壊活動を紹介している。そして、「日本の社会教育にみられる歴史認識の問題の所在について」では、日本の歴史認識問題の所在を鋭く指摘して、「甲午戦後の日本の台湾における『一体性企画』試論」「『大東亜共栄圏』に関する歴史的・現実的思考」で、日本の台湾占領期の施策や大東亜戦争について研究している。

最後に、「問題意識」として挙げられるのは中日友好であろう。

氏はまた、『東亜共同体』構築の思想的・文化的基礎——歴史のヒントと未来への追求の角度から」「歴史認識問題についてより多くの共通認識を得るために」「相互理解が中日友好関係を促す根本的な道」「中日文化関係及びその思考」「今日の中日関係の文化的背景について」といった論文を書き、歴史研究を通じて、両国の相互理解や中日友好の促進を強く唱えている。

右に挙げた氏の三つの「問題意識」は、中国史上の経世致用という学問の伝統を受け継ぐものと思われる。経世致用とは、現実離れた「学問」のための研究よりも、現実の問題を解決するための研究が提唱されるものであり、清代におけるこの思潮の中心地は、主に江蘇省と浙江省であった。氏の誕生地は、一九三七年八月十三日に勃発した「淞滬会戦」（第二次上海事変）時の日本軍の上陸地（川沙）であった。二千人の無辜が殺戮され、一万軒の家屋が灰塵に帰した翌年に、氏は生まれた。呱呱の声を上げた時点から、日本との切っても切れない運命が決められたと言えよう。その後、なぜ日本が中国を侵略したのかという疑問を抱きながら、徐々に日本史研究の道を歩むようになったという（四〇五頁）。

程度の差こそあれ、これは一九三〇年代生まれの二代目の日本研究者すべてについて言えることかもしれない。戦争中に生まれ、窮乏生活の中で育てられ、資料が欠如した状況に置かれながら、学問を継続していた体験は、経世致用の特徴をより鮮明なものに

したと思われる。そして、それ以上に、悲惨な戦争から教訓を見出し、中日の友好、世界の平和を求めようとする精神こそが継承されていくべきではないか、ということをも氏の名著によつて教えられた。